

先達の遺訓① 渋沢栄一翁(企画の3K 魔)

企業経営漫談士 岡野実空

新たな1万円札の顔となる偉人、渋沢栄一翁。みずほ銀行、王子製紙、東洋紡、サッポロビールなど500を超える企業や組織の生みの親で、ドラッカーも尊敬していた「日本資本主義の父」は、すでに多くの学者等に研究され、さまざまな切り口で論文や書籍に著されています。その中から今回は、作家・城山三郎氏の視点を借り、質・量ともに他を圧する「企画」の源となった尋常でない習慣、「記録魔」(城山氏は吸収魔と表現)、「建白魔」「結合魔」の3K 魔を考えます。

E-30 先達の遺訓① 渋沢栄一・3K魔

習慣1:「記録魔」 個人的データベース

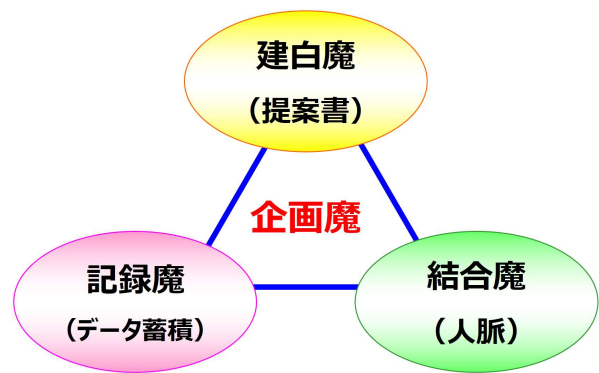
八代将軍・吉宗プロデュースによる桜の名所の一つ、東京都北区王子の飛鳥山公園。その一角にある渋沢資料館で、まず目につくのは、渋沢栄一翁の筆まめさ。日々見聞きしたこと、気づいたことの「日記」など、その「記録魔」ぶりは桁外れで、彼が生涯「好奇心」の塊だったことを物語ります。情報革命以前の時代、手製のデータベースは最強の情報基地。また、インターネットとスマートフォンのおかげで、多くのデータが簡単に入手できるようになったいまでも、企画のユニークさに結びつく切り札は、自ら動いて手に入れ、コツコツと手を動かして蓄積した「情報」や「知識」です。

渋沢翁周辺の政財界だけでなく、芸術やスポーツなど文化などの世界においても、一流の人物は例外なく「記録魔」です。(野球の長嶋さんを除く)

習慣2:「建白魔」 提言書

渋沢翁といえば、質量ともに他の追随を許さない「建白書」でも有名。採用された実業関係のものだけでも500超。不採用になったもの、その他の公的、特に教育に関するものなどを加えれば、生涯に4桁の企画書を作成した超「建白魔」。そこから私たちが学ぶべきポイントは、何はともあれ、「まずは書く」こと。頭の中にある漠然としたコトを、確かな事業に仕上げていく思考過程に「企画書」は欠かせません。また、その作成の途上で、関係者と相談し、さまざまな助言をもらいながら、有力な協力者として巻き込んで行く「根回し」は、企画実現への王道でもあります。

私が在籍した SEIKO グループの創業者、服部金太郎には、渋沢翁を見かけると、身を隠そうとしたという微笑ましい逸話が残っています。それは何かにつけ、知恵の提供だけでなく、相応の出資や寄付に応じざるをえなくなるから。因みに、渋沢翁は事業への出資ばかりでなく、私的な「献金魔」としても有名でした。



習慣3:「結合魔」 人脈

渋沢翁の人脈の幅広さは、いまに残る多くの「書簡」に顕著。各種の問い合わせばかりでなく、多数の依頼の手紙にも目を見張りますが、それはいまのネットワーク社会の先駆け。自らがハブとなり、実力者の協力を引き出したばかりでなく、知人同士の組合せから新たな事業を創造するという離れ業もしばしば演じています。いまから150年も前、すでに「ノウハウ(How)よりノウウ(Who)」を見抜いていた慧眼に、唯々恐れ入るばかりです。

40代後半から10年ほど、各社のセミナーで、私が最も数多く担当した「企画力」「提案力」。その終盤で必ず紹介した、渋沢栄一翁の上記の「3K 魔」。その中で、忘れることができないのは、そのコースの原型を共同開発した電機メーカーM社での、渋沢ファンの参加者のひと言。こちらが「結合魔」で締め、研修を終了しようとした瞬間、「先生、それでよく分かりました！ 渋沢翁にやたら多くの子供がいたことが！！」思わず、座布団3枚！！(男性しかいなかった)。(女性がいたら)座布団全部取れ！？

2019年8月18日(初出平成29年11月27日) 実空